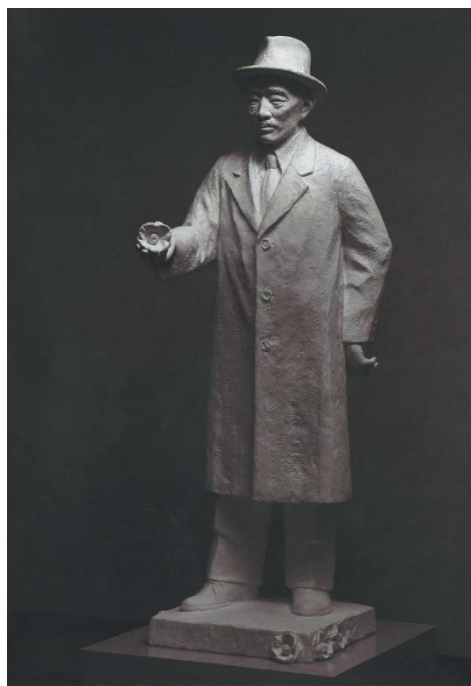


50 年に亘り制作してきた思い

大野 良一（昭和 43 年工芸科卒）

私は大動脈乖離という病気を 1 年半くらい前にして奇跡的に治ったわけですが、今日また心臓がおかしくなりそうで、ドキドキしながら上がってきました。どうぞ宜しくお願い致します。

これが寺田寅彦、今オーテピアに建った像の原型です。この寺田寅彦像の製作依頼のお話が来たとき、とても嬉しかったんですね。よし、これは本当に自分の代表作だという作品にしてやろうと燃えたんですけれども、反面非常に不安だったんですね。不安と言うのは何かと言いますと、銅像になって建つと、下手なもん造るとそれ、彫刻公害と言う公害になるんですね。下手に造ったら作家の私は笑われるだろうし、責められるだろう。そして、私に注文した人もなんであんなもん造らせた、あんなもん置くなと言われる。で、造られた本人もおかしなもんが建ったねえと言われる。で、それを毎日見なきゃいかん人は迷惑ですよ。それで、更に石とブロンズで出来ているから取り除けんとなると公害以外の何物でもない。そういうことになったら大変なことになると。責任をものすごく感じたんです。しかし、やりたいから喜んで、一生懸命やらせてもらいました。そして、やる以上はただ似てるとか、うまいことやったねえという褒め方では嫌だと、そんな立体看板みたいなものは造りたくないから、彫刻を造ろうと思ったんですよ。その為には寅彦の沢山の本を読ませてもらいました。寺田寅彦知りませんでしたのでね。そしたら、内容がとっても深いと言うか、もの凄く勉強させられたんです。寅彦さんにね。で、その成果としてね、私は次のような作品を造ったんです。



寺田寅彦像（2017 年）

これ、寺田寅彦が手に持っているのは、椿の花です。椿をぼんと落としたら、たいてい上向いて落ちると。椿というのは下向いて咲いているけれども落ちたら上向く。これ、不思議ではありませんかというお話があるんですね。本にそういう風を書いてある。そして、寺田寅彦の師匠である夏目漱石の俳句に『落ちぎまに 虻を伏せたる 椿かな』という俳句があると。そういうことはあられんはずだと。先生、間違っているということで、寅彦はぎりぎり椿を落として実験したらしいんですね。だから、大変その高さによって確率が違うという表を作っているんですよ。たかが椿がぼんと落ちて上向くか下向くかだけです。けれども、それを実験する、克明に見るというのはやっぱり科学者の目ですよ。地震とか宇宙の話をしている一方で椿を落としている、同じ人ですよ。それに感銘を受けまして、ポーズも椿を落としている像にしようと考えたんです。そして椿を沢山集めてカッターナイフで切って解剖して研究した。それをやっている間に面白くなってですね、これを巨大な椿にしたらどうなるんだろうと。だから、これ 1 個がだいたい五右衛門風呂くらい大きさに造ったんですよ。そしたら、その

私がずっと中央展に出品していて、平入選ばかり続けていた新制作展で新作家賞という賞を頂いた。この賞はその回に年に3点くらいしかないんですね。多くて5点くらい。だから、まさかそんなものをもらえるとは思ってなかったけれども、賞を頂いて。さらにその上に、その会を代表してベストセクションという東京都立美術館でもう一回展覧会をするということで、全国展の選抜展に出品させてもらいました。



藤の実 (2015 年)

と。で採ろうとしたけれども、手が届かない。30センチくらい高いんですよ。だから、どうしても欲しかったんでね、将棋をうっているおじさんにね「おんちゃん、あの藤が欲しいき、その椅子貸して」とね、奪っていったんです。おっちゃんあつぼろけと腰浮かしたんですけれども。それとってきて、無事ちぎって、よく観察すると、とても美しい。見ようによっては女性の胸とか尻とかのプロポーションによく似てるし、今までね、藤の実を彫刻にする、ましてぶら下がったように造るなんて人がいなかったようで、これも賞をいただいたんです。



寺田寅彦(Ⅲ) (2016 年)

話はまた元に戻りますけれども、寺田寅彦を造るにつけて、やっぱり顔が似てないといけないと思いまして、いくつか顔を試作したんですね。4つ程造ったんですが、1つ目は切手にあるようなやさしい顔、2つ目はあんまり優しいとは思っていかつい顔を造って、どうもいかんと思って、3つ目だから寅彦Ⅲなんですけれども、ちょっと気に入りましたね、ブロンズ鑄造したんです。そして東京の銀座のギャラリーせいほうというところに展示したら、ある有名な美術評論家、赤津侃（あかづただし）という方なんですけれども、通りがかりに寄って、じーっと作品を見てですね、そしてネームプレートを見て「お！寺田寅彦か。よく似てるなあ」と大きな声でつぶやいてくれたんです。そして隣におるお婆さんも「そうで

ございますね」なんて言うから、いい気なもんですよ。そしたら、ギャラリーの主も「よかったなあ。あの人、赤津さんって有名な美術評論家だよ。よく似てるってね。君、自信持てるね」言ってくれて。よし、あの顔で寅彦造っちゃおと思ったんです。しかし、時間が経つとなんだかそこらへんにおりそうな顔じゃないですか。なんぼそう言って貰っても、自分が気に入らにゃいかんなと思ってですね、それでみんな出会う人に「どうですか。寅彦さんってどんな顔しちよった」って聞くけど、誰もこんな顔って言ってくれん。ところがね、テレビ高知に勤めていた、ある先輩の友達が「私待ち受け画面にしているの。これ好き。」って言って見せてくれたんですよ。

それはね、北海道の中谷 宇吉郎（なかに うきちろう）という寅彦さんの教え子のその人と一緒に並んで写っている、死ぬ 3 年前の写真でした。この写真は帽子をかぶって非常に深い顔をしている、人生を全部背負ったみたいな顔をしている、私はこれ好きだったんです。ところがその「僕はこれ好きだからね」と言ってみせてくれた写真もそれだったんです。だから、あんなに褒めてもらったからあれにせんといかん思っていたのを思い切って変えました。そしてこの頭像は気に入ったからブロンズにして寅彦記念館に寄贈しました。そうして、全身像がブロンズになって帰ってきて私のアトリエへ着いた。ほっとしたんでしょうね。そのあくる日に大動脈乖離と言うのをやって、ヘリコプターで運ばれて奇跡的に回復しました。



寺田寅彦（Ⅳ）（2017 年）



これ、オーテピアに今実際ある寺田寅彦像なんですけれども。これ、こんなことを言ってくれた人がいるんですよ。ある美術の季刊誌の記者が、『ここは新しいオーテピアという建物です。その北東の門に東京の青山に見まがうようなものが出現した。こんな人ごみの中にこんな素敵な像を計画したのは誰。褒めちやる。』と書いてある。それで、『この像があるばかりにあの辺りの景観に品格が出た』と書いてある。こんな褒め言葉を頂い

て。私は、下品になったらどうしようかと悩みよったのを、その記者がそう書いてくれているので、これは彫刻家冥利に尽きると。今日講演会で言おうと思っていたのはこれだけです。もう一つ。実はですね、私余技として俳句をして遊んでいるんですよ。『雨上がり 草刈鎌を ずいと研ぐ』 雨が降ると植物が水を吸うので切り倒しやすくなる。そこで鎌を研ぐ晴耕雨読の生活をしゅうということで、こんなことを最後にちらっと披露して今日のお話を終わらせていただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

